中国貨幣の歴史

13 両晋（西晋・東晋）・五胡十六国時代の貨幣

晋・「五銖」

沈郎（五銖）銭

両晋（西晋・東晋）の貨幣

西晋・東晋では、政府による銭貨鋳造は行われず、漢代の「五銖」銭に倣った私鋳銭がわずかに鋳造されるにとどまった。このため、後漢末以来の銭貨不足、現物貨幣化がさらに進行したが、悪銭を中心とする銭貨の流通が継続した。

前涼・「涼造新泉」

後趙・「豊貨」銭

成漢・「漢興」銭

五胡十六国時代の貨幣

五胡十六国時代の華北では、多くの国が興亡し戦火が相次ぐなかで社会・経済は混乱し、銭貨の流通がほとんど途絶える状況となった。前涼、後趙、成漢などいくつかの国で新たな銭貨が鋳造されたが、極度の貨幣不足状況を解消するには至らなかった。

（写真は全て実物×100%）

三国時代に最大の勢力を誇った「魏」は263年に「蜀」を滅した。ほどなく、魏の実権を握っていた司馬炎が魏帝からの禅譲により帝位につき、洛陽を都とし晋王朝（西晋、265～316年）を樹立する。西晋は、280年に「呉」を平定して中国を再統一するが、後漢以来華北に進出しつつあった異民族の五胡（匈奴、羯、鮮卑、氐、羌）が西晋王朝内部の帝位をめぐる争い（八王の乱）に乗じて蜂起したことがきっかけとなり、50年余りで滅亡した。

西晋期の貨幣の発行・流通状況をみると、政府による銭貨の鋳造・発行は原料銅不足から行われず、わずかに私鋳銭が鋳造されるにとどまり、新たな銭貨供給がほとんどなかった。このため、後漢末以来の銭貨不足、悪銭化、現物貨幣化がさらに進み、市場における価格表示は銭貨に代わって布帛など現物貨幣を基準とすることが一般化した。一方、質のよい漢以来の良銭は政府と富裕層に集中・退蔵されたが、洛陽の王侯貴族間で贈答手段としてさかんに使用され、金銀に代わる希少価値を有していたとされている。

西晋滅亡後の華北では、異民族を中心とする多くの国が興亡する五胡十六国時代が130年余にわたり続き、相次ぐ戦火により耕地は荒廃し、流民が増大するなど社会・経済は著しく混乱した。銭貨についても流通が途絶える壊滅的な状況となり、布帛を切って貨幣として使用していたとされている。五胡十六国のなかには新たな銭貨の鋳造を試みた王朝もあったが、極度の銭貨不足を解消するには至らなかった。この時代の銭貨としては、河西地域で張軌が建国した「前涼」（317～376年）による「涼造新泉」（2ｇ前後）、一時華北全域を支配した羯族石勒の「後趙」（319～351年）による「豊貨」銭（3ｇ前後）、三国時代の「蜀」支配下の四川地域で建国した氐族の「成漢」（303～347年）による「漢興」銭などがある。このうち、「漢興」銭は、1ｇ前後の薄小な銭貨であるが、銭銘に年号を記すとともに中央の孔を挟んで「上下」に銭銘を刻んだ中国史上初めての銭貨であった。

江南では、五胡の進出により洛陽から逃れた西晋王族の司馬睿が建康（呉の建業、現在の南京）に都をおき晋王朝（東晋、317～420年）を再建した。東晋期の江南地域は戦火の影響が少なく、水田などの開発が進んで徐々に経済が発展していき、銭貨に対する需要も次第に増していく。しかし、政府による銭貨鋳造は行われず、新たな銭貨の供給は東晋王朝に仕えた大豪族沈充が私鋳した「沈郎（五銖）銭」程度で、三国時代の「呉」の銭貨や華北から持ち込まれた軽重さまざまな旧銭が流通した。江南地域では悪銭中心ながら銭貨流通が継続したが、良銭を中心に銭貨不足の状況に変わりはなく、銭貨需要に対しては地域外への銭貨持出禁止策により対応したことが知られている。

［山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館］

【参考文献】

川勝義雄、『魏晋南北朝』、講談社学術文庫、2003年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年
山岡直人、「中国貨幣の歴史11「五銖」銭の鋳造量不足と悪銭化、現物貨幣化の進行－後漢時代の貨幣－」、『金融研究』第24巻第3号、2005年